

企画展

描かれた花鳥の美

- 会場 1階 松平家史料展示室
- 会期 令和4年3月3日(木)
~4月19日(火)

大きく枝を伸ばす木や咲き誇る花、そこに集い飛び交う鳥を描く花鳥画は、日本で古くから親しまれてきた画題です。花鳥の美しさはもちろん、それを通じて自然の豊かさや生命力、四季折々の風情が描かれてきました。また、花や鳥たちの美しさは詩歌に詠まれ、その詩歌を題材にした絵画や工芸品も数多く作られました。

本展では、江戸時代を中心に室内を華やかに彩った花鳥画や、花鳥をデザインした衣装や道具を紹介します。江戸時代になり、それまでの伝統的な図様を受け継ぐだけでなく、写生に重点を置いた作品や様々な花鳥の組み合わせなど多彩に展開した「花鳥の美」をご覧ください。

※花鳥画

日本絵画の画題のひとつ。花と鳥だけでなく、広くは薄や葦、松や竹といった草木、蝶や猫、兔といった昆虫・獣も題材に含まれる。



ぐんきん 群禽松竹梅図屏風 狩野興碩筆 (当館蔵)

狩野興碩は江戸時代中期の福井藩御用絵師。奥絵師である中橋狩野家の主信に学び、後に7代福井藩主松平吉品に召し抱えられた。

松竹梅が枝を伸ばし、薔薇が咲く水辺に集う雉や鴨ほか小鳥たちが描かれている。



色絵桜樹図皿 (個人蔵 当館保管)



おしどり ついたて がんたい 梅に鴛鴦図衝立 岸岱筆 (福井市春嶽公記念文庫)

岸岱は江戸時代後期に京都で人気を博した岸派の2代目。裏面には、富士山と三保の松原が描かれている。

花鳥でめぐる十二月

花鳥画の題材の一つに、^{ていかえいじゅうにかげつかちようず}「定家詠十二月花鳥図」があります。これは平安時代末から鎌倉時代初期の歌人である^{ふじわらのさだいえ(ていか)}藤原定家(1162～1241年)が、建保2年(1214)に詠んだ和歌^{つきなみ}「月次花鳥歌廿四首」を絵画化したものです。その和歌は、1月から12月までを各月にふさわしい花と鳥で詠んだ和歌24首から成り、絵の題材とするために作られました。鎌倉時代に作られた題材ですが、現在確認できる作品は江戸時代以降のもので、その初期の作品として、^{かのうたんゆう}狩野探幽(1602～74年)や^{とさみつおき}土佐光起(1617～91年)ら江戸時代の絵画に大きな影響を与えた絵師らの作品が知られています。いずれも月ごとに歌に詠まれた花と鳥のモチーフを一図にまとめた作品を描いており、それぞれ図様に違いはあるものの、各流派でその後も受け継がれました。

定家詠十二月花鳥図は江戸時代前期の元禄期(1688～1703年)頃に盛んに描かれますが、次第に和歌の制約にとらわれず、自由な花鳥の組み合わせで1年12ヶ月をあらわした作品も描かれるようになりました。

※定家詠十二月(月次)花鳥和歌

藤原定家の私家集^{しゅういぐそ}『拾遺愚草』やその日記『明月記』によれば、^{のちににんじのみや}「後仁和寺宮」(^{どうじよ}道助法親王)が「月次の花鳥の歌の絵」制作を企画し、その題材となる和歌制作を定家に命じた。定家は、建保2年(1214)2月30日に「月次花鳥歌廿四首」を詠進したという。



定家詠十二月花鳥図屏風 ^{ひでのぶ} 狩野秀信筆 (大安禅寺蔵 当館保管)

4代福井藩主^{みつみち}松平光通の娘^{じゃくこういん}寂光院(1657～99年、3代肥前佐賀藩主^{つなしげ}鍋島綱茂室)の道具。寂光院没後に光通が建立した越前松平家の菩提所の一つである大安禅寺(福井市田ノ谷町)へ寄進された。

絵の作者である^{おもてえし}狩野秀信(1639～1713年)は、江戸幕府御用絵師のうち奥絵師に次ぐ第2位の職位である表絵師15家の一つ、^{ざるやちようだい}猿屋町代地狩野家の初代である。

次回の展示 企画展 維新の肖像

会期：4月23日(土)～6月5日(日)
会場：1階 松平家史料展示室

展示解説シート No.147 令和4年3月3日発行
福井市立郷土歴史博物館 〒910-0004 福井市宝永3-12-1
電話 0776-21-0489 Fax 0776-21-1489
担当：藤原千穂 印刷/宮本印刷